

## 田中朋弘『文脈としての倫理学』

ナカニシヤ出版、二〇一二年

佐々木拓

この五年の間、倫理学業界は数多くの優れた倫理学入門書に恵まれたように思われる。二〇〇七年の赤林(二〇〇七)、坂井・柏葉(二〇〇七)を皮切りに、伊勢田(二〇〇八)、児玉(二〇一〇)、児玉(二〇一二)<sup>1)</sup>と、倫理学の諸理論を広い範囲にわたって概説する、日本人の手によるテキストが続々と出版されている。このような状況は筆者のように大学で倫理学の概論講義を行う身には大変喜ばしいことである。本書「文脈としての規範倫理学」もまた、そのような入門講義の優れたテキストの一冊として読むことができるだろうし、本稿ではそのような観点から本書を評したい。以下では、まず本書の構成と内容を知るために、本書で行われている規範倫理学の分類について触れ、次にその特徴を解説する。

### 規範倫理学理論の分類

さて、著者(本稿の筆者との混同を避けるために以下「田中」と表記させてもらう)によれば、本書の目的は「規範倫理学の諸理論を分類し、それらがどのような文脈を織りなしているかを明らかにする」ことであり、「規範倫理学という学問分野を、一つの緩やかなストーリーとして理解」し、個別の理論を「相互関係の中で」語ることだとされている(52)<sup>2)</sup>。つまり、本書の目的は規範倫理学理論を特定の比較軸<sup>3)</sup>「文脈」の下で見ることにある。そのような意図の下で、田中は義務論、功利主義、徳倫理学、そしてケアの倫理という現代規範倫理学の主要理論を分類、紹介していく。

となると、この「比較軸」とは何かがまず問題となるだろう。田中にはいくつかの分類の視点を用意しているが、最も大きな軸

表 1

	理論分類	思想家	認識の観点／善の内容	適用の観点	
義務論	行為義務論	スミス	道徳感情・共感	個別行為	規則・行為に関わる理論
		ブリチャード、ブラッドリー	道徳的直観		
		サルトル	実存主義的決断		
	一元論的規則義務論	カント	定言命法	規則	
	直感的規則義務論	ロス	哲学的直観		
多元論的規則義務論	ロールズ	原初状態			
目的論	快樂主義的行為功利主義	ベンサム	快樂・苦痛の不在	個別行為	生き方の理想に関わる理論
	理想主義的行為功利主義	スマート	理想		
	理想主義的規則功利主義	ブランド	理想的道徳規範	規則	
	二層選好功利主義	ヘア	選好	行為／規則	
	徳倫理学	アリストテレス	エウダイモニア	性格特性	
		マッキンタイア	道徳的共同体内での物語の秩序		
	ケアの倫理	メイヤロフ	「場」における自他の自己実現	人間関係	
		ギリガン	自他へのケアと責任の引き受け		
ノディングス		ケアする関係			

が二つある。一つ目は「正と善の優先関係」である。田中はロールズの分類を参考しつつ、「正と独立に善を定義し、かつ善の最大化をもって正しさの基準とする」目的論グループと、「正と独立に善を規定しない、もしくは善の最大化を正しさの基準としない」義務論グループ（義務論の定義は目的論の定義の否定になっている）とに規範倫理学理論を大別する。本書では、前者のグループとしては功利主義、徳倫理学、そしてケアの倫理が考察され、後者のグループとしては種々の義務論的理論が解説される。

もう一つの分類軸は「道徳性の対象」である。これは道徳の対象として何を評価するかに着目した区分であり、これによって、規則や行為を道徳的評価の対象とする功利主義・義務論のグループと、行為者の性格特性を評価の対象とする徳倫理学・ケアの倫理のグループ（これらはまとめて「生き方の理想に関わる理論」とも呼ばれる）とに諸理論が大別される。規範倫理学には、一方で伝統的な理論の対比軸として功利主義対義務論という枠組みがあり、また他方では、近年流行しつつある理論としての「生き方の理想に関わる理論」対、従来の理論としての義務論・功利主義という枠組

みがある。この論争軸を田中は「善と正の優先関係」「道徳性の対象」という切り口によって鮮やかに浮き彫りにしている。

田中は以上の二つに加えて、主として義務論・功利主義グループに当てはめられる、二つの分類軸を提案する。一つ目は評価基準を何に適用するかを基準とする「適用の観点」である。

これによって義務論は行為義務論と規則義務論に、功利主義は行為功利主義、規則功利主義、そして二層功利主義にそれぞれ区分される<sup>(3)</sup>。「生き方の理想」に照らして性格特性を評価するという意味では、「生き方の理想に関わる理論」は適用の観点では「性格」を適用対象にする理論と見なすことが可能である<sup>(4)</sup>。もう一つの軸は「認識の観点」である。これは、行為や規則の評価基準（もしくは正しさ）をどのようにして認識するかに着目したものである。この観点はとりわけ義務論にとって重要であり、これによって義務論はさらにいくつかの理論に区分される。認識の観点からは、功利主義は功利の原理を根本原理として掲げ、また功利の原理は直観によって認識されるために、哲学的直観主義に分類されている。よって、功利主義の内部には認識の観点からの区別が存在しない。

これらの他に目的論に適用される「善の内容」による区分が存在し、功利主義がいくつかの理論に区分される<sup>(5)</sup>。また、生き方の理想に関わる理論においては、善とされる「生き方の理想」の内容にしたがって徳倫理学とケアの倫理が区別されることになる。

田中の仕事は、これら複数の分類軸によって形成された表のマス目に適切な倫理学理論を埋め込んで行く作業だと解することができる。本来ならここに理論と思想家の名前を列挙するところだが、紙面の関係で割愛した。代わりに、田中の紹介する理論を表にまとめてみたので、本書でどのような思想家がどのような立場で紹介されているかを見るには表を参照いただきたい（表1参照）<sup>(6)</sup>。

また、各理論の概略を手っ取り早く理解したい読者にとっては、各章末にある「本章のまとめ」にざっと目を通されることをお勧めする。これらには本書の要点が非常に手際良くまとめられており、本書のダイジェストの体を成している。「まとめ」だけを通読すると理論同士の対比が一層際立って見えるので、田中の言う「文脈」をおさえるのによい方法だと思われる。

### 本書の特徴

次に本書の特徴を批判的に紹介する。冒頭で述べたように、本稿では本書を倫理学講義におけるテキストという観点から見ているため、「批判」の内容もまた大学授業における教科書、参考書として読む際にどうかという評価に絞られる点をお断りしておく。

さて、本書のもっとも大きな特徴は考察の範囲を規範倫理学理論に限定している点である。倫理学における他の二つ中心的

領域、すなわちメタ倫理学と応用倫理学に関する議論を排することによって、田中は類書にはない多くの効用を生みだしている。その第一は、哲学史上の位置づけや現実問題への適用といった脈絡が諸理論から極力削ぎ落とされることで、「純粹な理論間の関係」が強調されるという点である。これは「文脈として」倫理学理論を捉えるという田中の目的に読者を導く上で大きく貢献している。

また、議論を限定することで、一つひとつの理論に対して類書に比べてより多くの説明がなされている点が評価できる。とりわけ、現代倫理学を学習する際にしばしば言及されるも理論的な詳細が明らかにされることが比較的少なかった理論について、類書と同等、もしくはそれ以上の紙面が費やされている点が高く評価できる。ロスやブランド、ヘア、メイヤロフの考察については、筆者自身が教鞭をとる上で非常に参考になった。また、これらの思想が一つのテキストの中で内容豊かに説明されていることは、学生にとっても学習上の利便性が認められるだろう。以上の点からすると、規範理論への議論の限定は、十分な量の規範倫理学理論をコンパクトな文量にまとめあげるために必要な行為であり、かつ有効な戦略だったと言える。

しかしながら、規範理論への限定はある程度のデメリットももたらしめている。例えば、応用倫理的な具体的議論が欠けているがために、説明の抽象性が高過ぎて初学者には理解しづらいためではないかと懸念される箇所がいくつか存在する。例えば、

カントの定言命法やロールズの「実践」概念の説明、ブランドの「平均功利主義」についての解説、そしてヘアの二層理論の扱いについてそのような懸念が抱かれた。この辺りの考察については、単なる言葉の繰り返しやリダンダントに感じる説明もいくつか目につき、初学者が読み進める際に大きな壁になるように思われた。残念ながら、第二部の功利主義に関する一連の論述に関しては、応用倫理的な議論を交えながら議論を進める伊勢田や兎玉に軍配が上がると言わざるをえない（ただしこの評価は、一定の正確さと詳細さをもって、三大理論のすべてを一冊の本で取り扱っているという本書の利点を失わせるほどではない）。

また、「文脈」の強調が解釈を難解にしていると感じられるところもある。この点で筆者が違和感を感じたのはカントの定言命法の取り扱いである。田中はカントの文脈上の位置づけについて、定言命法が一元論的な根本原理であると述べ、それが功利主義における功利の原理と同等の正当化原理であると説明している（p. 43, 46, 51, 66）。しかしながら、功利の原理が正しい行為／規則を一意に同定できると同じ意味で、カントの定言命法が一元論的正当化原理であるとは言えないのではなからうか。というのも、筆者の理解では、定言命法の基本法式は道徳的義務の必要十分条件を与えるものではないからである。また、田中は「カントにおいては道徳的義務同士の葛藤が生じない」という旨の説明をしているが（p. 67, 68）、「約束を守るために嘘の約束をせざるを得ない」といった同種の規則に対す

る遵守と違反の選択が同時に迫られた時に、定言命法がこの種の葛藤を解消できるとは筆者には思われぬ。これらの点において、定言命法が功利の原理と同等の地位にあるとは言いやい難いように思われる。ちなみに、筆者にとつては、カントの定言命法（およびその法式）は「一元論的正当化原理」と呼ぶよりは、規則の認識の方法と捉えるのが適切であるように思われる。カントの義務論を「定言命法」という認識の視点をもった行為義務論に分類する可能性もあるだろう。<sup>(7)</sup>

### おわりに

本書には、筆者が倫理学の授業である程度の詳細さをもって「教えたい／学生に理解して欲しい」と感じる理論のすべてが収められている。その一方で、本書には抽象性という大きな壁があることも確かである。この点を考えると、本書は初学者への入門書として捉えるよりもむしろ、ある程度規範倫理学の研究トレーニングを積んだ（準）専門家が自らの理論の文脈内での立ち位置を確認し、自らの研究対象を反省するための地図として役立てるのがよいかもしれない。そういった見方では、本書を学部レベルの教科書として使用するのには困難であり、大学院生レベルを対象とする授業や読書会でのテキストとして有用だという評価が妥当であるように思われる。

### 注

- (1) 他にも優れた入門書が存在するが、ここでは私が実際に授業において使用経験があるか、使用予定があるもののみに言及した。
- (2) 本書からの引用についてはページ数のみを付す。
- (3) ここまでの分類に関しては、田中による図1、2<sup>(5)</sup>が理解の助けになる。
- (4) ただ、ここでの「適用」は原理の「適用」とは意味を異にする点には注意が必要である（p. 133, 236を参照）。また、図1では徳倫理学とケアの倫理学とで適用の対象を区別してある。これは本書中では明確に言及されておらず、筆者の解釈が強く入っている。
- (5) 例えばベンサムの説明で、田中は「快樂主義」は認識の観点からの分類であると述べるように（p. 8）、実際には「適用の観点」の意味には揺れがある。この点を強くとるならば、善の内容による区分は認識の観点へと回収されるものなのかもしれない。
- (6) なお、功利主義におけるハロッド、徳倫理学で扱われるフットとアンスコム、ケアの倫理で紹介されているコールバーグについてはそれらの内容が規範理論の分析として位置づけられていないため（むしろその内容は諸々の立場が登場した事情や歴史的な文脈の紹介と言えよう）、図の中に名前を埋め込むことができなかった。
- (7) 図1にはこの立場が反映されている。

参考文献

赤林朗(編)(二〇〇七)『入門・医療倫理Ⅱ』、勁草書房。

伊勢田哲治(二〇〇八)『動物からの倫理学入門』、名古屋大学出版会。

児玉聡(二〇一〇)『功利と直観』、勁草書房。

——(二〇一二)『功利主義入門』、ちくま新書。

坂井明宏・柏葉武秀(編)(二〇〇七)『現代倫理学』、ナカニシヤ出版。

(c)2013 たく・立命館大学